

編集： 山田浩司 & 美澄

Address: 2208 North Quantico Street, Arlington, VA, 22205, USA

Phone: 1-703-241-0621 E-Mail: mickeyy@pc4.so-net.ne.jp URL: <http://www.sanchai.net>

ワシントン春到来

1ヶ月前華氏20度台、今70度台

ワシントンは今、春爛漫である。巷ではイラク戦争が紙面を賑わし、日常生活は再び「コード・オレンジ」が点灯して首都は再び厳戒態勢に入ったけれど、2月の豪雪下の重苦しい雰囲気とは違い、3月下旬の「コード・オレンジ」は、幾分かは重苦しさも失せた気がする。高く降り積もった雪も、3月下旬になってようやく完全に融けたようだ。2月から3月にかけて急激に暖かくなってきた。木々の蕾も徐々に膨らみ、桜の開花も間もなくだ。

春の訪れとともに、街行く人々の服装も徐々に軽くなってきた。ワシントンの街角ではノースリーブのビジネス・ウーマンが目立ち始め、Tシャツ・短パンでジョギングするランナーも増えてきた。子供達が週末も学校の校庭で遊ぶ姿もよく見かけるようになり、課外スポーツもサッカーだの野球だのと盛んになりつつある。今年の冬は本当に寒かった。寒さが厳しかっただけに、人々はようやく訪れた春を謳歌している。

テロの恐怖は相変わらずだ。予測がつかないだけに、びくびくしてても仕方がない。胸を張って毎日を過ごしたいと思う。時々、イラク戦争の後の世界はどうなるのだろうかと考えたりもする。アメリカが首尾よく戦争に勝てたとしても、アメリカ人勝ちのこの世界への人々の反発は、今よりもいっそう増すような気がしてならない。

などと書いて原稿を保存していたら、3月30日になってまたもや雪が降った。春だから気温も氷点下とまではいかず、積もった雪もすぐに融けたが、前日から一気に20度も気温が下がるとさすがに体の調節が効かない。

頑張れ、みきおのスクールライフ

先生との面談を終えて

先月の「サンチャイ通信」でとり上げてよかったのだが、3月上旬、樹生が通うタッカホー小学校では、今期二度目の父兄懇談会が開催され、パパがハーモリー先生と面談してきた。ハーモリー先生は樹生のクラス「サラマンダー」の担任である。共働きの家庭も多いことから、面談は朝の7時から20分単位で行なわれる。2日間の日程だが、その間学校は休みになる。朝7時20分に面談が始まってほどなくして、樹生のESOL（英語補習プログラム）のクレイマー・ロバーツ先生も加わり、2対1の面談になった。

前回もそうだったが、アメリカの先生は子供を褒めまくる。ハーモリー先生によると、2月の大雪を題材にして、子供達に4コマの日記を書かせたところ、樹生はソリを持って外に飛び出し、隣りのマリ―に後ろから押してもらってソリ遊びをしたことを描き、各コマに付けた短文も、綴りは間違っているけれども子音字をきちんと識別して大人がなんとか拾える文章にしていたそうだ。また、樹生は他の子供に比べて算数ができると褒められた。単純に「 $2+2=4$ 」とか「 $10+10=20$ 」といった同じ数字の足し合わせに過ぎないが、「家でも勉強させているのか」と聞かれると、パパは少なくともそんなことは

教えずに樹生が勝手に自分でやっていることなので、ちょっと嬉しくなったりする。パパがせいぜいやっていることといったら、ごくたまに英語の絵本を読み聞かせることくらいだ。勿論、1年前と違い、今の樹生にとっては、英単語を1つの意味の塊りで見なしてそれで発音と意味を識別できるようになることが大事なので、読む時も、1語1語を指でなぞりながらゆっくり読むようにしているが。クレイマー・ロバーツ先生からは、「日本人としてのアイデンティティを維持することも大切だから、日本語の本も読んであげて下さい」と念を押された。

樹生はクラスの活動にも非常に協力的で、人気者だと言われる。その点では、パパやママに似なくて良かったと思ったりする。お世辞も半分入っているのだろうが、「ミキオはいつまでこちらにいられるのか。ミキオがいなくなると寂しくなる」と言われると悪い気はしない。懇談を終えて、私は職場に直行したが、帰宅して樹生を見た時、思わず抱きしめたくなくなった。

毎日喜んで登校し、スクールバスの運転手のおばさんから「ミキオーツ！」と毎日声をかけられている。とても学校生活をエンジョイしているように見える。ある意味、パパの職場生活や、ママの家庭生活よりも、もっと環境に溶け込んでいるように思う。今も仕事で使う英語では苦戦しているパパとしては、樹生の適応力が羨ましくて仕方がない。

スキー場でのパンク

スキーはグループで行くに限る！

この冬、「人間嫌い」を自称する私が、なぜかイベント企画をすることが多かった。単なる宴会だけじゃなく、NBAのバスケットボール観戦だとか、スキー・ツアーだとか、ホーム・パーティーだとか、よくもまあ人を動員する企画のコーディネートをこんなにやっていたものだと思う。スキー・ツアーなど二度も企画した。3月2日（日）も、そんなスキー・ツアーで、大人10人、子供6人、プラス赤ちゃん1人の大量動員をかけて、ホワイトテール・スキー場まで出かけた。

大人2人、子供2人の我が家の家族ツアーでは、千智を託児所に預け、私か美澄が樹生の相手をしている間にもう1人が1時間自由に滑るといったようなローテーションで、半日持てばいい方なのだが、さすがにこれだけのグループになると、子供が子供の相手をして、それを引率する大人は2名くらいでなんとかになってしまうので、私と美澄が同時に子供達から離れて自由に滑走することもできる。昼になればロッジのテーブルは大混雑するが、席取り係を決めておけば、各自が入れ代わり立ち代わりで昼食を取ることできる。また、通常半日しか持たない我が家の子供達も、他に友達がいると俄然ハッスルして、1日中でも平気で滑ってしまう。スキーはグループで行くものだとつくづく思った。

この日は、とうとう千智までゲレンデ・デビューを果たした。1年前の樹生を思い出していただければわかる通り、若葉マークの幼児スキーヤーは、自分が付けた板がどんどん滑って足を持って行かれることに多少の恐怖感があり、なかなか上手く立って板をコントロールすることができない。中腰の無理な姿勢で千智の体を支えて一緒に滑ったママは、かなりお疲れの様子だった。そうしたママの御厚意に甘え、板を買ったばかりのパパは、1人黙々とより上のレベルの斜面に挑んだ。

そうして1日楽しんだ後、各自の車でスキー場を後にするわけだが、なんとその時になって、我が家のミニバン後輪のパンクを発見してしまった。スペア・タイヤに交換するだけならわけないが、問題はスペア・タイヤで80マイルもの距離を走るのは困難だということだ。ましてやこの日は日曜日で、たいていの自動車修理工場は休業である。スキー場のカスタマー・サービス・デスクで近くの修理工場かタイヤ・ショップがどこにあるのか聞いてみたが、結局モノになりそうな情報は得られなかった。こりゃ近くのヘイガーズタウンで一泊かなと覚悟もした。

でも、うちのミニバンがパンクしたとの情報を携帯で受けたIFCの松岡さんのグループが、先行して最寄の高速道路入り口近くにあるガソリン・スタンドを片っ端から調べて下さった結果、1件だけパンク修理を受けてくれるスタンドを見つけ、それを携帯で連絡して下さった。一方、私達とスキー場からの撤収が最も後発になったIMFの石川さんファミリーは、うちの車のスペア・タイヤへの交換を手伝っ

て下さった。タイヤ交換を始めたのは午後 5 時 30 分——じきにあたりが真っ暗になる時間帯だ。1 人でもタイヤ交換ができなかったわけじゃないが、一緒にいて下さるだけでも心強かった。

スペア・タイヤに履き替え、件のガソリン・スタンドまで行き、首尾よくパンク修理も 6 時 30 分頃には終わった。そして、一路ワシントンへ。夜は夜でバージニア郊外の韓国焼肉レストランで恒例の打ち上げ会、トラブル話に盛り上がり、レストランを出たのは夜 10 時近かった。

ハプニングはあったけれど、楽しいツアーだった。自分の任期の関係上、アメリカでスキーするのはこれが最後の機会となるだろうが、グループで出かけるのはなかなかメリットが多いというのを実感した。自称「人間嫌い」が、この歳にして学んだ教訓である。

ありがとう、内田のおじちゃん みきおの涙にこちらもホロリ・・・

1 月 4 日から 3 月 15 日まで、昔 JICA のネパール事務所で一緒に働いた内田淳君が、世銀評価監理局 (OED) のインターンとして、ワシントンに短期滞在した。短期の研修だったけれど、OED は昔から JICA の職員を研修で受け入れるのに前向きだったこともあり、特に ODA 評価のスペシャリストとして JICA の中でも将来を嘱望される内田君が、OED の中で JICA の存在感を示し、多くの世銀職員の知己を得たことはとても価値あることだと思う。

プライベートの面でも、昔のよしみで、随分と遊びに付き合っていたいただいた。内田君が NBA のファンだということは随分前から知っていたので、着任早々にワシントン・ウィザーズの試合観戦に一緒に出かけた。スキー・ツアーに誘ったこともある。また、週末の外食やお呼ばれ、我が家での鍋パーティーにも何度かお誘いした。丁度、寒さが最も厳しかった 2 ヶ月半の間である。格好の遊び相手になっていただいたと思う。本当にお世話になりました。

そして、我が家の子供達にとっても、内田君は、日本からおみやげとしてビデオや雑誌を運んで来てくれたサンタさんであるばかりか、雑誌の付録の紙工作を組み立ててくれる遊び相手でもあった。内田君にも 2 人のお子さんがあるが、我が家の子供達は、率先垂範してお子さん向けおみやげとしてのおもちゃ選びで私たちにいろいろアドバイスしてくれた。内田君が当地を発つ前夜、明日のフライトは早いから早く寝るように子供達を促したところ、「おじちゃん帰っちゃうのボク悲しいよ」と言って樹生が泣き始め、布団を頭からかぶって暫くシクシクやっていた。樹生も、だんだん「別れ」の意味を理解できる年齢になってきたようだ。

パパの自己申告書 (その7) 出でよ、日本のコンサルタント

3 月は、日本政府が世銀のコンサルタント信託基金 (CTF) プログラムに資金拠出してくれるかどうかで非常に気を揉んだ 1 ヶ月になった。回答期限を 1 週間以上過ぎても音沙汰のない東京と、「カネ、カネ、カネ」とうるさい上司との間で板挟みとなり、かなりストレスを溜めた。同じような催促を他の担当国に対してもしなければならず、コペンハーゲンだとかヘルシンキだとかに電話をかけたり、法兰克福とメールのやりとりをしたりした。その甲斐あってデンマーク、フィンランド、ドイツ、オーストラリア等からは拠出の通知を受け取ったのだが、残念ながら CTF 最大拠出国である日本は、4 月 6 日現在も未だ拠出額について何の連絡も下さらない。

このような資金拠出の意思決定が日本の場合遅れがちになるのは、CTF の執行率が芳しくないことによる大きな理由がある。本当にニーズがあるのかもわからないところに資金を出せるかというのは、予算担当者だったら当然考えることだ。実際、今年度の執行率は、年度末までいくら頑張っても 50% を少々超えるレベルにまでしか達しない。日本政府が、ニーズの所在を見極めた上で拠出額を決めたいと思うのはそれなりに筋が通っている。しかし、我が社の上層部の考え方は逆で、いくらぐらい資金が利用できるのかわからないと、世銀の各部局は来年度の活動計画が立てられないと言う。ニーズは資金が利用可能であることがわかって初めて顕在化するという考え方なのだ。だから、私が日本政府の言い

分を代弁しようとする、「お前は馬鹿か」と言わんばかりの反応がうちの上司から返ってくる。

それではなんでそんなに日本の GTF の執行率が悪いのかというと、今年度の特殊要因の他に、そもそも日本のコンサルタントのことを世銀職員はあまり知らないという問題がある。GTF は、元々自国のコンサルタントに世銀での仕事受注経験を積ませて国際競争力を付けさせるためにできた基金なので、日本の GTF の場合は備上できるのは日本人のコンサルタントだけだ。ところが、私は JICA 出身だから日本のコンサルティング会社のどこがどこでどんな仕事をしているかとか、その分野に強いとか、それなりに知識があるけれど、日本での職務経験がなく世銀に採用されてたたき上げで来た日本人職員の方ほど、日本のコンサルティング会社のことはご存じない。日本のコンサルタントはどこがどの分野に強いかを知らずして、日本のコンサルタントを活用しようという考えにはおおよそ辿り着けないだろう。

日本のコンサルティング会社の構想力、英語での報告書作成能力にも改善の余地はあると思う。日本自体が官主導で戦後の経済発展が達成されてきたので、政策立案が官の手に握られていて、日本の民間部門では革新的発想とそれを公共部門に提案してゆく情報発信能力が十分育って来なかった。だから、今の世銀が求めているような革新的な政策構想を途上国政府に提案してゆく力が、今の日本のコンサルタントには欠けている。それに、国際機関に対する企業のマーケティング努力が足りないということもある。日本のコンサルティング会社は、大した革新的政策構想がなくても、JICA や JBIC といった国内の援助機関からの受注でそこそこ喰って行ける。日本国内での仕事の方が直接人件費の単価も間接人件費も高く付けられる。国際機関で仕事を受注しても儲からないというコンサルティング会社からの批判の声を聞いたことも一度や二度ではない。そもそも、グローバルなマーケットで他国の企業との厳しい競争を勝ち抜いて何が何でも受注しようというインセンティブがあまりないのだ。

コンサルティング・サービスの需要側にも供給側にもこれだけの問題があって、それで GTF の執行率が 50%程度しかないのだから、それならそれで拠出額を大幅に減額すればいいではないかという考えも当然あるだろう。でも、私のここでの評価は、ドナーからいくらお金を調達できるかで決まってくる。だから、「大幅減額」など口にしようものなら、自分の立場が危ぶまれる。だから、執行率を上げる方策を考えるしかないのだ。JICA が今年 10 月に独立行政法人に移行したら、JICA 自身が GTF の調査プロジェクトを受注することだってあり得る。そうなってくれたら、今の状況は少なからず改善される筈なのだが、すぐには難しいのだろうか……

編集後記～山田家短信

- 3 月末のとある平日、宴会を終えてほろ酔い気分で夜 10 時過ぎに帰宅すると、起きていた美澄ママが 1 枚の紙を見せてくれました。なんとそこには、「100×200」などという三桁の掛け算を筆算でやられていました。勿論、樹生が書いたものです。ちゃんと「20,000」という答えも合っています。翌朝、こんな高度な算数を既に幼稚園でやっているのかと樹生に尋ねたところ、「Math Game (算数ゲーム)」を学校でやるのは楽しいと嬉しそうに答えました。先月紹介した「スーパー・サウンドブック」よりも好きだと言います。さすがに、それでは「20,000」をどう読んだらいいのかまではよくわからなかったようですが（答えは「Twenty Thousand」です）、筆算の加減乗法を既に幼稚園でやっているのには驚かされます。勿論、樹生の場合はどうもとりわけ算数が好きなようで、あまり褒めたら図書館で借りてくる本まで算数（これが筆算による余りの出る割り算まで出てくる！）になり、グラフの作り方とか、既に関心を持ち始めています。自分が樹生と同じ年齢だった頃は、読売ジャイアンツの打順（柴田、高田、王、長島……）を漢字で書いていたのですが、ある意味、同じような異才を樹生は発揮しています。それを伸ばしてくれればと思いつつ、ママは樹生に小学校向けの計算ドリルをやらせ始めています。（浩司）

パパの体重

83 kg

(3月5日現在)